

## ジャック・ロンドン & 柴田元幸

辻原 登

昔、ジャック・ロンドンの「To Build a Fire」を「焚火」というタイトルの邦訳で読んだが、それがどの一冊でだったか忘れてしまった。ずいぶん時が経って、2008年の10月、『柴田元幸翻訳叢書 ジャック・ロンドン 火を熾す』で再会、再読した。

アメリカ小説については、私なりに好みのリストがある。ホーソーン、メルヴィル、ジャック・ロンドン、スタインベック、ヘミングウェイ、マラマッド、最近ではダイベックやコーマック・マッカーシー……、とまあごくポピュラーな線なのだが、以前、ふと思いついて、彼らの短篇の中からそれぞれ一つを選び、さらにその中から最高的一篇を挙げよ、と問われたら、と考えてみたことがある。だが、ただ一つというのは苦しい。苦しまぎれに、「火を熾す人バートルビー」と書きつけた記憶がある。それほどメルヴィルの「代書人バートルビー」と「火を熾す」は突出していて、しかもこの二つは比べようがない。

去年(2013年10月)、『柴田元幸翻訳叢書 アメリカン・マスターピース 古典篇』が出た。そこには「バートルビー」と「火を熾す」が、ホーソーン「ウェイクフィールド」、ポー「モルグ街の殺人」、ヘンリー・ジェイムズ「本物」などと共に収録されているが、柴田氏の「編訳者あとがき」によって、「火を熾す」(1908年刊)には元バージョン(1902年発表)があることを教えられた。彼はこんなふうに書いている。

——ロンドンの作品において、人は自然を相手に戦い、死を相手に戦う。当然、最後のには負けに終わる人間の運命だが……。しかし、元バージョンではこの勝ち負けがまったく逆になっている——。

元バージョンは、柴田訳で雑誌「Coyote」34号(2008年12月刊)に載っているという。私は急いで「Coyote」34号を取り寄せた。

件の作品の前に置かれた柴田氏の解説で、「火を熾す」はロンドン短篇の最高傑作であるばかりでなく、世界の傑作短篇アンソロジーを編むとしたら、アメリカ代表として「バートルビー」と「火を熾す」だと宣言しているのを読んで、我意を得たりと先ず膝を打った。

元バージョンを読む。

1908年の決定版と元バージョン(1902)には大きな違いが四つあった。

一つは、元バージョンは決定版よりうんと短いこと。およそ五分の二ぐらいか。二つは、元バージョンでは、主人公はトム・ヴィンセントという名前が与えられているが、決定版では終始「男」としか呼ばれない。名無しの権兵衛。

三つは、決定版で、

男のすぐうしろに、一匹の犬がついて来ていた。大きな土着のエスキモー犬で、掛け値なしの狼犬である。毛は灰色、外見も気質もその兄弟たる野生の狼と少しも変わらない。とてつもない寒さに、犬は気を滅入らせていた。

と物語がはじまって数ページで犬が登場し、以後、「男」に劣らず重要な役割を担うのだが、元バージョンでは犬の影も形もない。狼犬を書き加えることで、決定版はその分量が二・五倍にもふくらむと同時に、傑作に仕上がったのである。

四つは、もちろんラストだ。元バージョンは、寒さとの戦いに勝ち、経験から学んだ人間として語りはじめられる。だからこそ主人公は固有の名前を持つ。

いっぽう決定版では、果たして「男」は、次々と襲いかかってくる寒さとの戦いを戦い抜いて、仲間のいる野営地まで辿り着けるかどうか、分からないまま進行してゆく。読む側のスリルはいや増しに増してゆく。

火を熾すことを知っている人間と、熾すことは知らないが、火のなんたるかを知っている犬。彼らの行動描写が素晴らしい。時に、ロンドンの筆は、犬の内面まで踏み込んでゆく。

(……) その間ずっと、犬はじっと座って男を見守っていた。その目には、一種切なげな思いが浮かんでいた。犬は男を、火を与えてくれる者として見ているのに、火はなかなか現われなかったのだ。

最後は、「男」も立派にふるまう。

(……) それが最後のパニックだった。呼吸と自制心を取り戻すと、体を起こして、威厳をもって死を迎えるという観念を頭に抱いた。といっても、観念はそのような言葉で訪れたのではなかった。俺は馬鹿な真似をやった、首を切り落とされた鶏みたいに駆け回って——浮かんだのはそんな比喩だった。

このあと、世界中、あまたの短篇作品中、比類のないラストが待っている。

元バージョンにないのは、このラストの崇高さだ。単に勝ち負けの逆転というだけではない。

決定版には、他にも元バージョンにはなかった、大きな自然空間の広がり、それに比例するように作品空間の深化がある。

十二時になった。一日で一番明るい時間だ。だが太陽はずっと南の方で冬の旅を続けており、地平線を越えはしなかった。地球の丸みが、太陽とヘンダスン・クリークのあいだに立ちはだかっている、真昼の雲なき空の下を男が歩いても、何の影も出来ない。

(……) 宇宙の寒さが、この地球の、保護されていない末端に強打を加え、そして男は、その保護されていない末端にいたために、強打の衝撃をまともに喰らったのだ。その強打を前にして、男の体の血液はひるんだ。

細部もまた比較すると面白い。例えば、樹上の雪が落ちて、ようやく熾した火を消してしまう場面は同じだが、決定版のほうがうんと精細で躍動的だ。

作品においても、生の人生同様に、<sup>なま</sup>歳月は無駄に経たない。

人生には勘違い、思い違いというものが数限りなくあり、それらはおおむね悲しい結果や落胆を生むのだが、時に、とても美しい、宝物となるような思い違いというものがある。

私にもあり、それはジャック・ロンドンにまつわるものだ。

これもずいぶん昔のことになるが、レイモンド・カーヴァーの「ぼくが電話をかけている場所」を村上春樹訳で読んだ。アルコール中毒更生療養所<sup>サナトリウム</sup>を舞台にした話だった。

「僕」はひどいアル中で、もう二度目の入院だ。妻にもガールフレンドにもすっかり愛想づかしされて、打ちひしがれている。

「僕」と新入りのジョー・ペニーこと JP は、サナトリウムのフロント・ポーチの椅子に座っている。JP が煙突掃除人になったいきさつを「僕」に語る。

JP はハイスクールを卒業したあと、やりたい仕事もみつからずぶらぶらして、あるとき、友人の家に行くと、煙突掃除の女の子がやってきた。ぞくっとくるような娘だ。煙突掃除を終えた掃除人のキスは、どうやら幸運のおまじないということになっているらしい。友人は顔を赤らめて彼女の頬にキスをした。帰ろうとする娘に、JP は言った。「俺もいいかな?」「ええ、いいわよ。おまけのキス、持ってきたから」

というわけで JP と娘、ロキシーは結婚し、JP も煙突掃除人になり、子供も生まれた。そして、アル中になった。殴り合いのけんかで、ロキシーのパンチで JP の鼻が折れた。「僕」がこの話を JP から聞いて一週間ほど後、ロキシーがサナトリウムを訪ねて来る。JP が「僕」を友だちだと紹介する。JP とロキシーが寄りそってポーチから中へ入って行く。「僕」がロキシーに呼びかける。「キスしてもらえたら、上手くいきそうだ」。ロキシ

ーはふり返って、「もう何年も煙突掃除はやってないけど……、でもいいわ」

変奏されて、くり返される二つのキスに、この短篇小説の旨味が、熟れた果実のように閉じ込められているのだが、私にもっと強い印象を残したのは別のエピソードだった。

フロント・ポーチで、「僕」が JP からロキシーとのなれそめの話を知っていると、生垣の向こうを一人の男が通りかかる。そのとき、サナトリウムの所長が葉巻を吸うためポーチに出てきて、

「いま通った男が誰か知っているか？」

二人は首を振る。

「ジャック・ロンドンだよ。あの谷の向こうに大きな農園を持って住んでいる。『荒野の呼び声』の作者だよ。彼もいずれ酒で命を縮めることになるだろう」

小説中に仮構された人物が、生垣の向こうを通り過ぎてゆく歴史上実在の人物であるジャック・ロンドンを見送るという場面に、ロンドンの熱烈ファンである私はうっとりとなった（というふうに、いつのまにか私は思い込んでいた）。

そのことがあって、のちに私は自分の小説（『許されざる者』）の中で、日露戦争のさなか、主人公とジャック・ロンドン<sup>ザルニー</sup>を大連で出逢わせ、『荒野の呼び声』について意見を交わすシーンを書き込んだりした。事実、ロンドンは 1904 年、従軍記者として日露戦争取材し、アメリカの新聞に 19 篇の記事と数百枚の写真を送っている。

なんだか頭が焼けるような気がする、体じゅうの血が流れ出てしまうように思われる。彼（アンドレイ公爵）は目の前にはるかな、高い永遠の空を見た。（略）

「ああ！ この男は生きている。」

ナポレオンは言った。

「この青年を起こして繃帯所へ連れていけ！」

（『戦争と平和』第一部第三篇）

トルストイが創造した最も魅力ある人物アンドレイ公爵と、歴史上最も魅力ある人物ナポレオンとの邂逅の瞬間である。

柴田元幸の「火を熾す」とその元バージョンがきっかけになって、久しぶりに『荒野の呼び声』（最近の深町眞理子訳『野性の呼び声』光文社文庫で再読）、ボルヘス編纂による「バベルの図書館シリーズ『J・ロンドン』」で、「マプヒの家」「生命の掟」など五つの短篇を読み返したりして、すっかりロンドンの世界に浸ったあと、カーヴァーの短篇が頭に浮かび、本棚のどこやらから埃まみれの『ぼくが電話をかけている場所』（村上春樹訳 中公文庫 昭和 61 年）を引っ張り出した。読んで、びっくりした。

サナトリウムの所長フランク・マーティンはポーチに出てきて、葉巻をくゆらしながらこう言うのだ。

「ジャック・ロンドンが昔、あの谷の向うに広い土地を持っていた。君らの見ている緑の丘のちょうど向う側だよ。でも彼はアルコールのおかげで死んだ。それを教訓にしろ。彼は我々のうちの誰よりも優れた人間だった。しかし彼もまた酒を統御することができなかったんだよ。彼は葉巻の残りを眺めた。火は消えていた。彼はそれをバケツの中に放った。「君らもここにいるあいだに本が読みたくなったら、彼の『荒野の呼び声』というのを読むといい。題を聞いたことはあるかね？ もし読みたいんなら、中にある。半分犬で半分狼という動物の話なんだ。あれほどの本はもう出てこないな。しかしどうだろう、我々がその当時ここにいたらジャック・ロンドンを助けてやれたんじゃないかな。(……)」

所長が去ったあと、JPは言う。「でもジャック・ロンドンなんてすごい名前だな。俺もそんな名前がほしかったよ。今みたいなものじゃなくってさ」

それから何日かして、ポーチで「僕」とJPは、JPの妻のロキシーの訪問を、昔、ジャック・ロンドンが住んでいた谷の向こう側を眺めながら待っている。ロキシーが着いて、あのキスの場面だ。

JPとロキシーが寄りそって中に入ってゆき、一人ポーチに取り残された「僕」は、階段にもたれかかって、女房に、それからガールフレンドに電話をしてみようと思えるのだが、そのとき、ふと、そういえばジャック・ロンドンのものを何か読んだことがあったっけ？ そうだ、高校生のとき、短いものをひとつ、一人の男が寒さに凍えて、火を熾さなければ凍死するしかないという話、火は熾すけど、枝の雪がどさっと落ちてきて火を消してしまうのだ……。

——とんでもない勘違い、思い違いがあった。ロンドンは1916年、41歳で死んでいる。カーヴァーの小説の登場人物とロンドンが会うわけがない。だけど、私はずっと、「僕」とJPがいるポーチの向こうを彼が通り過ぎてゆく光景を信じてきた。

勘違いを悟ったが、落胆はしなかった。何かここには、事実を超えた貴重な経験が籠もっていると考えるが、いまそれを言葉に記すことはできない。

いつか私の小説のどこかで、J・ロンドンと柴田元幸が出会う場面を空想すると楽しくなる。そのとき、経験が明らかになるかもしれない。